

「誠」の額を見つめて

横山京子

私は今、「誠」の額を眺めながら、在りし日のミキ先生のお姿を思いうかべ、様々な思いを巡らせています。

これはミキ先生の直筆によるもので、私と主人との結婚の祝いとして学長室にて直々に手渡していただいたものです。一度引越しをして、掛かる場所こそ変わりましたが、二十一年の間、変わらず家族の集まる居間にあって、もうすっかり我が家にとけこみ、なくてはならないものの一つになっています。

この「誠」を座右の銘とされ、女子教育のために身を粉にして一心に努力をされたミキ先生は帰らぬ人となられました。

思いおこせば、私がミキ先生に初めてお会いしたのは昭和四十四年の春、入学式の当日でした。ミキ先生の郷里と私の実家の母の郷里が同じ沼隈郡であったことにも親しみを感じ、栄養士の資格を得ることと、大学生活へのほんの少しばかりの憧れをいだいて、短期大学部食物栄養学科に入学しました。入学式は中島校舎にあった体育館で行われました。ミキ先生は髪をきりりと後ろでまとめられ、紋付き袴の装いで、背筋をピンと伸ばされたたくしゃくとしたお姿は、一目でご自身に大変厳しい方であることがわかりました。

その折のお言葉は、今となっては定かではありませんが、女子教育に対するご自身の強い思いを説かれたと記憶しております。

当時の私は、本当に苦勞知らずの世間知らずで、精神的にも非常に軟弱でありましたから、ミキ先生の熱意を込めたお話も、重々しいお話しとしか受けとめられず、初めて親元を離れる不安と、根の谷川に掛けられた今にも壊れそうな木橋や、上原校舎の向こうに見える採石場の荒々しさや、何もかもがわびしく思われ、校歌が流れる頃には、涙がポロポロこぼれていました。ミキ先生がお知りになっていたら、ひどく落胆され、悲しまれたかも知れません。この日がミキ先生との初めての出会いの日であり、武田学園での出発の日でもありました。

しかし、二年間の学生生活を振り返ると、後にも先にもあれほど勉強した日々があつたのだろうかと思えるほど、一所懸命でした。それは私だけではなく、クラスのみんながそうであつたように思います。それは、折りにふれては聞いた「為せば成る」というお言葉や、ミキ先生の裏表のないお人柄や、教育に対する姿勢が、お世話になつた諸先生方を通して私達学生にも伝わっていたからであるかと思ひます。

卒業後の二年間は、副手としてお世話になり、いつまでも学生気分抜けない私は、失敗も多く、辛いことも沢山ありましたが、様々な職務の中で、大切なものを多く学ばせていただきました。

武田学園での四年間の在籍の後、私は、縁に恵まれて結婚をいたしました。私の主人のことは、ミキ先生も大変よくご存知でしたので、いつの日でしたか、主人の中学生の頃のエピソードを、満面の笑みをうかべながら話されました。私にとって、ミキ先生はやはり近寄り難く、いつも緊張して、胸をドキドキさせながらお会いすることが常でありましたから、この折のミキ先生の笑顔と楽しいお話は、わずかな時間ではありましたが、本当に仕合わせ

に思える時でありました。

結婚後も、時折ミキ先生をお訪ねしておりました。休日にお伺いすることが多かったのですが、ご自宅の方で、ゆっくりくつろいでおられるということは、先ず無いことで、たいいてい学長室の方へお伺いすると、そこで執務をとっておられました。

そして、これは大変恐れ多いことではありますが、ミキ先生自ら、私たち家族をもてなして下さることがありました。何もないからと、差し出して下さったものは、ホットカルピスでした。カルピスは、冷たくして飲むものばかり思い込んでいましたが、温かい湯気と一緒に鼻をつく甘酸っぱい香りは、とても心地よく、本当においしくいただきました。

子供たちにも、やさしく接して下さり、まだ小さかった長男に「偉くなりなさいよ。」と言われ、微笑んでいらつしゃつたお顔が、目にうかびます。

あの涙の入学式から、四半世紀が経ち、最後のお別れをした時のミキ先生は、薄く紅をさしておられ、まるで眠つていらつしゃるかのように安らかで、きれいなお顔をしておられました。「ミキ先生、本当にご苦勞様でした。どうぞ、もうゆっくりとお休み下さい。」と、手を合わし、お見送りをしました。

私にとって、知り得る限りのすべての人の中で、ミキ先生は最も偉大な方でした。ミキ先生は、帰らぬ人となられました。沢山のご恩をいただいたことを心から感謝し、そして武田学園がより一層発展され、すばらしい後輩たちが巣立ちますようお祈りしております。